

親鸞における獲信者の研究

——信巻真仏弟子釈を中心として——

玉 木 興 慈

獲信の念仏者（以下、獲信者）とは、信一念に正定聚に住する者をいうが、その呼称は、親鸞の著作では様々である。しかし、信者という呼称は全くといってよいほど使われていない。この事が何を意味しているかについて、『教行信証』信巻真仏弟子釈、特にその御自釈（七五頁）を中心に考察していく。

(1) 弟子とは釈迦諸仏の弟子なり

ここで、親鸞は、獲信者を釈迦だけではなく、諸仏の弟子と記している。釈迦と諸仏を同列に配することによって、両者を阿弥陀仏の法の伝達者と捉えているということが出来る。従って、獲信者もまた、法の伝達者であり、法を伝えることによって、未信の者を獲信に導くはたらきを担うことができる者と捉えていることがわかる。

(2) 金剛心の行人なり

金剛、或いは、金剛心という言葉は、『教行信証』の中に

も所々に出てくる言葉であるが、金剛心とは、衆生の心を表現したものではなく、仏の心を表現したものである。未信の者であろうと、獲信者であろうと、衆生の心は、虚仮不実な心でしかないというのが現実である。勿論、その不実の在り方が違うのであるが、その不実な心しか持ちえない者に対して廻施されるのが、阿弥陀仏の心であって、阿弥陀仏の心を指して、金剛心といってしていると窺うことができる。

では、獲信者を金剛心の行人という、その親鸞の意図はどこにあるのだろうか。金剛心は、「願力廻向の信樂」「願作仏心」「横の大菩提心」（六九頁）、「眞実信心」「願作仏心」「度衆生心」「衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしめる心」（七二頁）等と示されるように、阿弥陀仏の、衆生を攝取せずにはおけないという願心であり、この願いが金剛の如き心であって、何ものにも遮られることのない心であると示されている。この願い、阿弥陀仏の願いを行ずる人、それが獲信者である。

阿弥陀仏の心をその如く、この世で讃嘆することのできる人、それが獲信者である。獲信の一念に、罪惡深重の凡夫を救うという阿弥陀仏の心がわかり、自身も阿弥陀仏の金剛心の中に摂取されていることがわかる。その阿弥陀仏の大悲心を行ずることのできる人が、獲信者であるという。すなわち、真仏弟子が金剛心の行人と記されることは、獲信者が、阿弥陀仏の金剛心の中にあるということ語る、その語るということが行であり、獲信者のみが、真に語ることができるのである。

(3) 斯の信行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきが故に、真仏弟子と曰ふ

ここで問題となるのは、「斯の」という言葉と「信行」という言葉が具体的に何を指すものであるのかということである。「行信」と示さずに「信行」と示されているところに注目すれば、自然と読むことができる。この「信行」という語は、『教行信証』の中では、ここでしか用いられておらず、他は、「行信」という語となっている。「行信」の語が用いられている箇所は、六箇所ある。初めの1文は、総序の文であり、他は行巻に見つけることができる。「遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」(二頁)、「真実の行信を獲れば、心に歡喜多きが故に」(三三頁)、「十方群生海、斯の行信に帰命すれば、摂取して捨てたまはず」(三三頁)、「往相廻向の行信に就いて、

行に則ち一念有り、」(三四頁)、「誓願に就いて真実の行信有り、亦方便の行信有り」(四二頁)、「斯れ乃ち選択本願の行信なり」(四三頁)と、このようにある。これらから、「行信」という語は、直接的には阿弥陀仏の行信が示されているということが出来る。つまり、南無阿弥陀仏の大神と、至心・信樂・欲生の三心が示されているということが出来る。また、「行信」という言葉を見れば、『教行信証』の六巻の流れの順になっており、真実の行・大神が示される行巻、そして、その大神によって獲信に至る信巻という順に行と信が示されている。真実の行とそれによって獲得される信が説かれるのが「行信」という語であつて、つまり、阿弥陀仏の法の道理・行巻に説かれる念仏の真実・はたらきを一言で指し示した言葉であるということが出来る。

一方、「信行」とは信が先に立ち、行がその後位置している。これは、行者自身の獲信と獲信によって現れる行を意味していることができる。そして「斯の」という語は、先の「金剛心の行人」を指すと考えれば、獲信者の行とは、先に「金剛心の行人」として示した行であり、阿弥陀仏の大悲を行じているということであると考えられる。つまり、「行信」とは、未信の衆生を獲信に導く行と、その獲信が語られるということであり、「信行」とは、未信の衆生の獲信と、獲信後の行が語られている、このように区別することが

できる。行巻であるから「行信」、信巻であるから「信行」と示されているのである、と単純に考えるべきではなく、それらには、意味があるということが出来る。未信の者が、大行のはたらきによって、獲信に導かれる。そして、次に、その獲信に導かれた者が行じることによって、さらに、他の未信の者を獲信に導くことができるのである。これが、延々と保たれることによって、阿弥陀仏の法が伝達されるということになる。そして「斯の信行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきが故に」真仏弟子であるといわれるのである。必ず大涅槃を超証することができるのは、「斯の信行」によるという。「斯の信」だけによって大涅槃を超証することができるのではなく、そこには「行」があるという。ここに獲信者の意味があるということが出来る。獲信者というのは、自身の獲信にとどまることなく、己れの獲信から生じる行ということがある。獲信者に、この意味の行がなければ獲信者の価値がないとまでいっても過言ではないと思われる。

以上、真仏弟子釈、特にその御自釈のみの考察を行ってきたわけであるが、上で示した御自釈の解釈を通して明らかにになったことは、獲信者を真仏弟子に当てはめることができるが、真仏弟子釈においては、その中心は獲信者の「信」ではなく、むしろ「行」にあるということである。「行」なくして獲信者を語ることはできない。この意味において、親鸞が

「信者」という言葉をほとんど使うことなく、「行者」「行人」という言葉を用いたことも首肯されるのである。ここでは、獲信者の行ということに焦点をあてたわけであるが、具体的に獲信者の行にどのような意味があるのか、という点が課題として残されたことになる。法の伝達ということを少し記しておいたが、具体的にどのようなように理解すればよいのか。この課題を解決してくれるのが、御自釈以下の諸引文ということになるのであるが、その解釈は今後の課題として残されたことになる。

註 文中の頁数は真宗聖教全書Ⅱのものである。

〈キーワード〉獲信者、真仏弟子、金剛心、行信、信行

（龍谷大学大学院）